

熊本県 取組成果発表資料

令和6年（2024年）1月30日（火）



本日の内容について

1. 導入と熊本県の現状
2. 遠隔授業について
3. コンソーシアムを活用した探究活動について
4. 今後の方向性

1. 導入と熊本県の現状

導入背景・課題

熊本県の現状

- 県の人口に対する熊本市の人口の割合… **43%**
- 県立高校の立地が「0ないし1」である市町村の割合… **80%**
- R3入試で定員に満たなかった公立高校（全日制）の割合… **82%**

※R4, R5入試においても大きな変化なし

今後予想される課題

①地方の多くの
高校で定員割れ

②地方高校の学
級数・教職員数減

④都市部の
大規模校へ進学

③生徒のニーズに
応じた教育が困難

地域の課題

若年層の流出

地域の活力低下

若い才能の埋没

など

「地域の高校」として魅力化を図る必要がある

目的

CORE事業を通して熊本県全体として明らかにしたかったこと

熊本版COREハイスクール・ネットワークにおける遠隔授業の自走化の可否

目的・目標

【目的】

・「教科・科目充実型」の遠隔授業を通じて、
「多様な学びの中で、地方の資源を発掘し、活かし、伸ばす人材の育成」や、
「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高等学校」を実現する。

【目標】

・第一高校(第一高校教師、スーパーティーチャー)や、県立教育センター(近隣の県立高校配置のスーパーティーチャー)を主たる配信拠点とした遠隔授業の実施
...習熟度授業、発展的科目、専門教科科目、実技系科目の試み等
・構成校を一体とした、きめ細やかな進路指導の実現

CORE事業を通して熊本県全体として明らかにしたかったこと

熊本版COREハイスクール・ネットワークにおけるコンソーシアムの連携強化の実現

目的・目標

【目的】

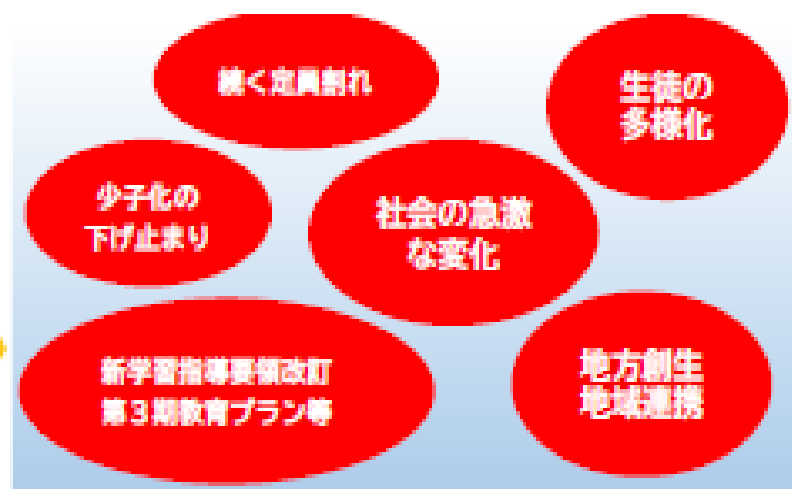
・学校間連携の運営体制、地域との協働を通じて
「多様な学びの中で、地方の資源を発掘し、活かし、伸ばす人材の育成」や、
「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高等学校」を実現する。

【目標】

・県内(熊本、阿蘇、天草、人吉球磨)を一体化した地域課題解決のための探究活動(くまモン(熊本の人)プロジェクト)の実施
・コンソーシアムと学校運営協議会を一体化した、地域の拠点としての高等学校づくり。
・ネットワーク構成校と地域の特徴を生かし、学校外の教育資源を活用した探究的な学び及び地域課題の解決等に関する探究的な学びの実現

熊本県のCOREハイスクール・ネットワーク





新しい時代に対応した
魅力ある学校づくりへ
～学んでひらく夢へのとびら～

主な取組

- ①熊本スーパーハイスクール(KSH)構想(Ⅰ、Ⅶ)
- ②先進的な科学技術やIT技術を学ぶ学科等の設置検討(Ⅰ、Ⅲ)
- ③国際バカロレア認定校・学科等の設置検討(Ⅰ、Ⅲ、Ⅵ)
- ④総合学科やその他の新たな学科等の設置検討(Ⅰ、Ⅲ)
- ⑤高大連携の推進(Ⅱ)
- ⑥高校間連携による充実した多様な学びを可能にする「県立高校 One Team プロジェクト」(Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ)
- ⑦「地域との連携による未来人材共育プロジェクト」(Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ)
- ⑧遠隔授業等による小規模校の教育の充実(Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ)
- ⑨高校のICT教育日本一の具現化(Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ)
- ⑩スーパーティーチャーの活用等による「進学サポートシステム」の構築、授業の質のさらなる向上(Ⅰ～Ⅵ)
- ⑪少人数学級編制の検討(Ⅲ、Ⅶ)
- ⑫学習者用パソコン(1人1台)導入、大型掲示装置、ネットワーク環境(無線LAN)の整備等(Ⅳ、Ⅶ)
- ⑬県立学校施設長寿命化プランによる施設・設備の充実(Ⅶ)
- ⑭入試制度のあり方の検討(Ⅶ)

事業の概要と計画（ICTの活用）

ICTを活用した連携・協働の取組の概要

- 第一高校・県立教育センターを主たる配信拠点とした遠隔授業の実施（第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校、県立教育センター）
- 県内（熊本、阿蘇、天草、人吉球磨）を一体化した地域課題解決のための探究活動（くまモンプロジェクト）の実施

3年間の事業計画のイメージ

1年目（R3）
準備・試行

- ・ 学校間の日課などの共通化
- ・ 学校間連携の調整
- ・ 遠隔学習用機器の導入
- ・ 遠隔授業の試行

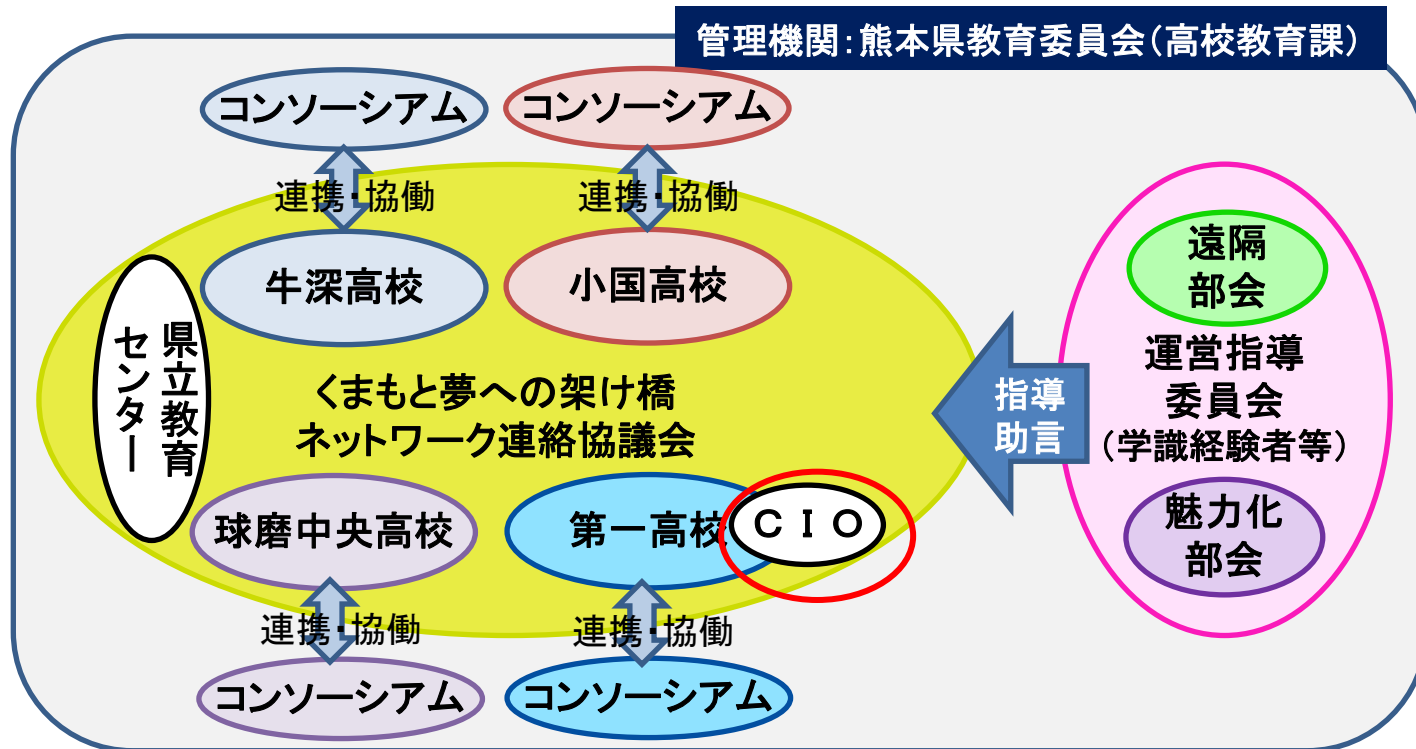
2年目（R4）
実行・評価・改善

- ・ 遠隔授業の実施
数学、地理歴史、外国語、商業（計5科目）
- ・ くまモンプロジェクトの実施

3年目（R5）
拡大

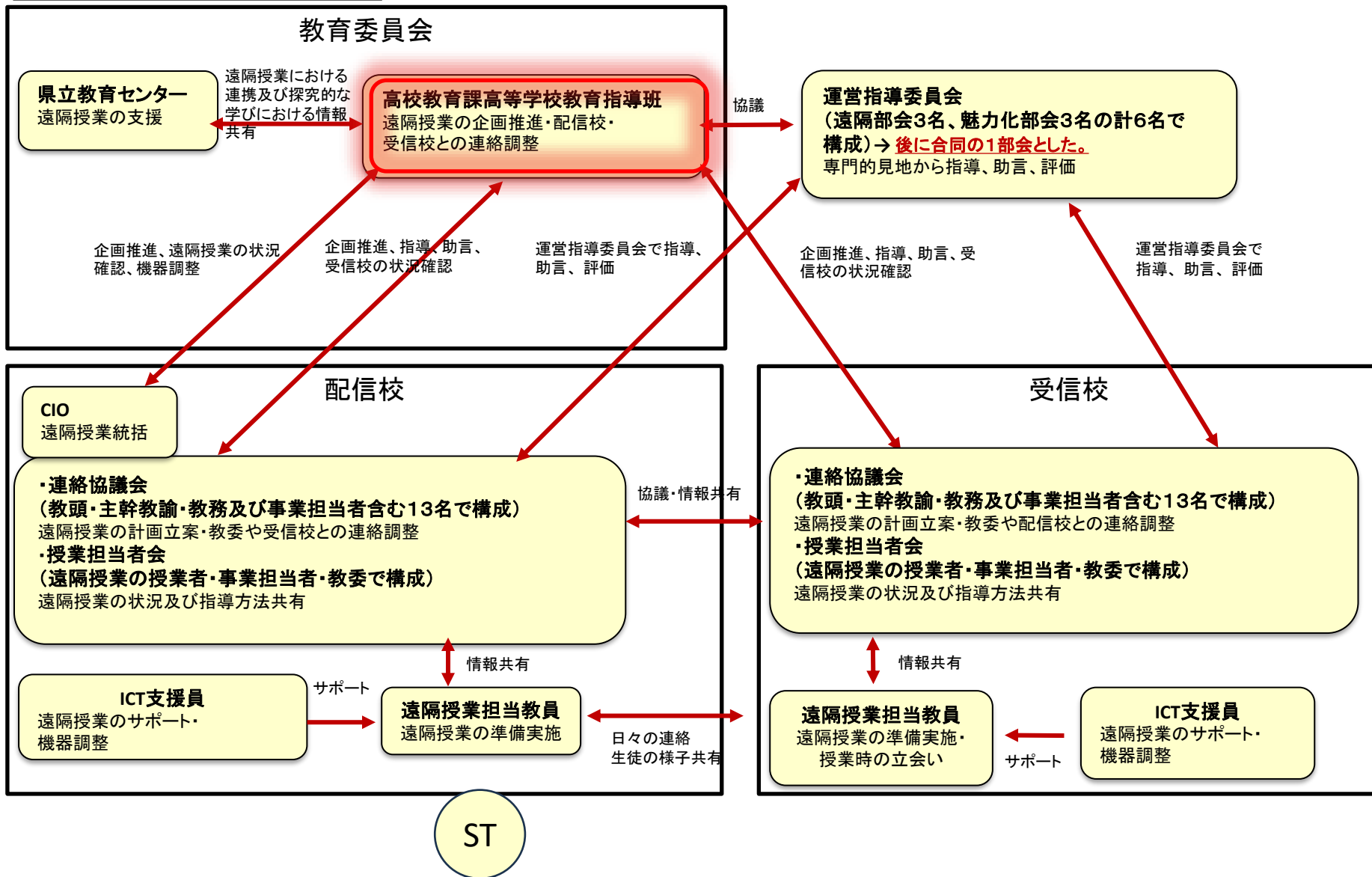
- ・ 遠隔授業の科目の追加
地域の課題解決や発展的な学びに関する学校設定科目、音楽（計16科目）
- ・ くまモンプロジェクトでの県外高校との交流

事業の組織構成と役割分担



- ・くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会・・・学校間の調整、事業の方向性の協議
- ・運営指導委員会・・・遠隔授業、地域との連携・協働の在り方への指導助言
- ・コンソーシアム・・・高校と連携・協働し、地域を生かした探究的な学びを推進する

遠隔授業実施体制



R4-R5 遠隔授業における実施教科・科目

実施年度	科目	配信校	受信校
R4	数学B	第一高校	小国高校
	実践文系数学	第一高校	小国高校
	マーケティング	球磨中央高校	小国高校
	地理A	第一高校	牛深高校
	異文化理解	教育センター(ST)	球磨中央高校

・普通科目に加え、実技を伴う科目（声楽）や探究科目（グローバル・スタディーズ）を配信し、科目充実型の遠隔授業へ

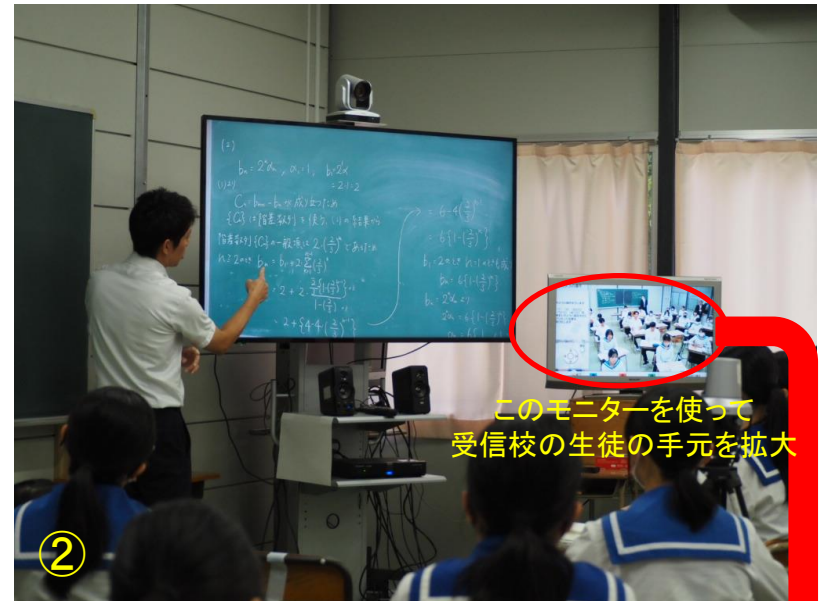
・スーパーティーチャーによる発展系科目を取り入れ小規模校における大学受験を支援及び教員の資質向上

4教科5科目から
5教科7科目へ拡充

実施年度	科目	配信校	受信校
R5	数学B	第一高校	小国高校
	実践文系数学	第一高校	小国高校
	マーケティング	球磨中央高校	小国高校
	異文化理解	教育センター	球磨中央高校
	声楽	牛深高校	小国高校
	グローバル・スタディーズ	球磨中央高校	牛深高校
	発展英語	八代高校(ST)	小国高校

R5 遠隔授業の様子(数学B)
授業者:第一高校 辻正利 教諭

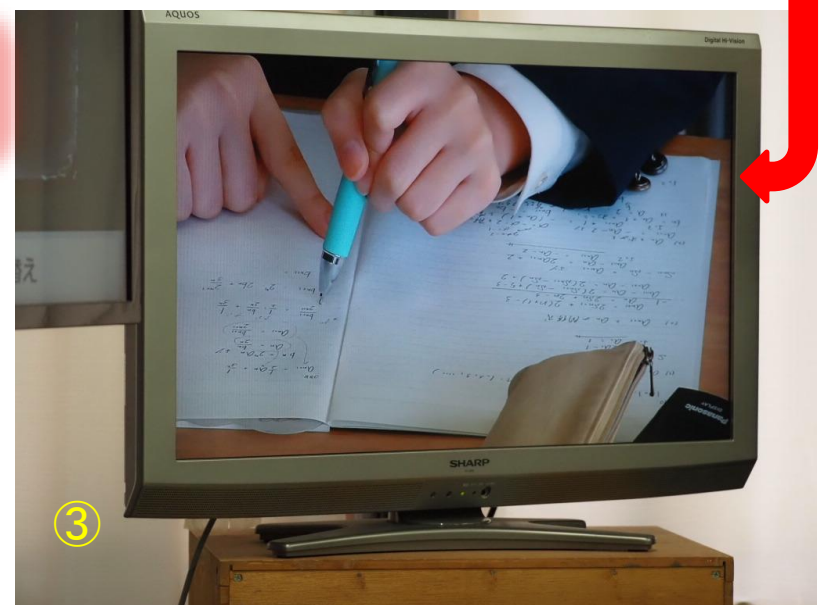
配信校(第一高校):33人
受信校(小国高校):2人



①受信校の生徒が自分の解答を解説

②授業者が配信校の生徒の解答を補足

③授業者は配信校の生徒の問題に対するアプローチを、手元をアップして見取ることもある



R4: 演習の際は、配信校(第一高校)の生徒のみが解答・解説を行っていた。



R5 授業者による新たな取組 (数学B/実践文系数学)

R5: 受信校(小国高校)の生徒も黒板に書いた自分の解答を解説。授業者は配信校の生徒にもその解答方法について考えさせる。さらに、受信校の生徒の解答方法について質問し、解答者の考えを確かめる。受信校の生徒の理解が更に深まる。

受信校の生徒は意欲的になり、効果はとても大きかった。(受信校立会の先生より)



熊本県における遠隔授業の比較(まとめ)

形態	双方向(合同型授業)				一方向(受信校のみに生徒がいる場合)		
科目 (教科)	数学B (数学)	実践文系数学 (数学)	マーケティング (商業)	音楽 (音楽)	グローバル・ スタディーズ (公民)	異文化理解 (外国語)	発展英語 (外国語)
受講人数(配信/受信)	33/2	33/2	31/5	2/1	34/4	0/27	0/2
受信側の立会者	教員(専門)	教員(専門)	教員(公民科)	教員(理科)	教員(理科)	教員(専門)	教員(専門)
遠隔授業の適不適	○	○	○	×	△	△	△
対面授業 (最低年2回実施)	学期に1回が 適切。	学期に1回が 適切。	現状の年2回で 良い。	多ければ多いほ どよい。 ※R5は年3回実 施(それでも少な い)	多ければ多いほ どよい。	学期に2回ずつ が理想(行けるだ け行きたい。成果 発表の際は特 に)	学期に1回が限 界(移動距離の 問題)
成果	【生徒】 ・大学進学とい う目標を共有 でき、お互いの モチベーション が上がった。	【生徒】 ・大学進学とい う目標を共有 でき、お互いの モチベー ションが上が った。 【先生】 ・教え方の研 鑽ができた。 ・問題に対す る新しいアプ ローチの発見。	【生徒】・受信校側 の生徒が、マーケ ティングの授業を 受け、進学の進 路決定の材料と なった。 ・受信校側の家業 (旅館)を継ぎたい 生徒が商業経 済検定2級に合 格。	【生徒・先生】 ・受講したい生徒 に対し、希望科目 を開講できた。	【生徒】 ・お互いの地域課 題を共有すること ができ、それぞれ について意見交 換をしたり、課題 を比較することが できた。	【先生】 ・指導教諭とのIT を通して、生徒を やる気にする導 入方法や教え方 について学ぶこと ができた。	【先生】 ・効果の有無に ついては今後の 検証が必要だが、 授業の手応えと しては効果を感じ る。特に外部検 定を想定した写 真や絵の口頭描 写等ICTは効果的。
課題	【先生】 ・見取りの際、 画面越しの確認 はできている が、直接的な やり取りの中 ではできない ため、本校(配信 側)の見取りと 比較すると不 十分。	【先生】 ・見取りの際、 画面越しの確認 はできている が、直接的 なやり取りの 中ではできな いため、本校 (配信側)の見 取りと比較す ると不十分。	【先生】 ・受信校側の生徒 の見取りについ ては、どうしても受 信校の担当者任 せになってしまう。	【先生】 ・実際の発声の 響き、発音、表現 を正確に聞き取 れず、適切な評 価が難しい。 ・歌わせながらの 指導ができず、 指導中に何度も 伴奏を止めなけ ればならない。	【先生・生徒】 ・見取り後の指導 は生徒との関係 性がなため行 っていく。 ・作業中に個別 のコメントを送 っても気づかない 生徒が多く双方 向のやり取りが 難しい。	【先生】 ・学習内容の性 質上ペアワーク、 グループワークを 取り入れている が、画面ではほ ぼ見取りができ ない。 ・(授業者が)学 習効果を感じにく い。	【先生】 ・機材不足のため、 音声が届き 取れないことがあ る。 ・進学者向けのた め、紙ベースでの 作業も多いことか ら立会者の協力 なしには成立しな い。

数学B/実践文系数学における教師の役割等

	配信校(第一高校)	受信校(小国高校)
役割	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容に係る打ち合わせ ・時間割変更等の日程調整 ・授業の計画・実施 ・評価(成績算出) 	<ul style="list-style-type: none"> ・出欠確認 ・プリント等の配付 ・突発的な機器の不調等への対応 ・指示が通らない(理解できない)生徒への助言 ・授業の内容に係る打ち合わせ ・時間割変更等の日程調整 ・評価(成績算出)に係る情報(意見)交換等
生徒への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・受信校の生徒にも自分の解答を解説させる。 ・配信校・受信校の生徒の解答方法に対する質問、解答への補足説明 ・受信校の生徒の問題へのアプローチの確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・初見で解けなかった問題に対しどのようにアプローチすべきかヒントを与える。 ・授業後のフォローアップ
教師の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の準備や実施については、配信の有無で変わることはなく、負担は全くない。負担感があるのは、互いの学校行事・日課の違いによる授業の調整のみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の経験を活かして、生徒が解りやすい教え方を考えるようになった。 ・授業後のフォローアップが手厚くなった。 ・同じ問題に対しても配信校の先生のアプローチから違った見方を学ぶことができ大変勉強になった。

3年間のまとめ(遠隔授業)

<p>CORE事業を通して熊本県全体として明らかにしたかったこと</p>	<p>熊本版COREハイスクール・ネットワークにおける遠隔授業の自走化の可否</p>
<p>目的・目標</p>	<p>【目的】 ・「教科・科目充実型」の遠隔授業を通じて、 <u>「多様な学びの中で、地方の資源を発掘し、活かし、伸ばす人材の育成」や、「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高等学校」を実現する。</u></p> <p>【目標】 <u>・第一高校(第一高校教師、スーパーティーチャー)や、県立教育センター(近隣の県立高校配置のスーパーティーチャー)を主たる配信拠点とした遠隔授業の実施</u> …習熟度授業、発展的科目、専門教科科目、実技系科目の試み等 <u>・構成校を一体とした、きめ細やかな進路指導の実現</u></p>
<p>3年間の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小規模校における大学受験に向けた切磋琢磨する環境の創出 ・5つの科目を受信している小国高校における進学実績の向上 [R3] 国公立大学 8名、私立大学 7名、短期大学1名 (普通科55名) [R4] 国公立大学10名、私立大学14名、短期大学3名 (普通科59名) [R5] 国公立大学 3名、私立大学 1名、短期大学2名、海外大学1名 (普通科35名) R5. 12月現在 ・スーパーティーチャーによる遠隔授業による受信校立会教師の指導力向上
<p>総括</p>	<p>小規模校における生徒の多様な進路への対応については、普通科目、実技を伴う科目、探究的な学びの性格を持つ科目、進学者向け科目等様々な科目を配信したことで、進学実績の向上だけでなく、地元住民から遠隔授業を学校の魅力の一つとして継続する声上がるまでになった。また、スーパーティーチャーに協力を得ることで、受信校の教師の教え方や資質の向上にも繋がった。実施科目については、実技を伴う科目については見取りをはじめ多くの課題が残ったため、改善を加えて継続するか廃止するか整理が必要である。県全体に遠隔授業を普及させるには、教員の負担を軽減するためにコーディネーターの配置や研修の充実及び予算の確保が必要であり、完全な自走までには、まだ時間を要すると考える。</p>

事業の概要と計画（探究的な学び）

関係機関と連携・協働する体制の構築に関する取組の概要

コンソーシアムと連携・協働した、

- 地域の拠点としての高等学校づくり
- 地域の課題解決のための探究的な学びの実施

3年間の事業計画のイメージ

1年目（R3）
計画

- ・ コンソーシアムの設置
- ・ 校内推進体制の構築
- ・ 地域と連携・協働した探究的な学びの計画作成

2年目（R4）
実行・評価・改善

- ・ 地域と連携・協働した探究的な学びの実施
- ・ くまモンプロジェクトの実施
- ・ 学校の魅力化に関する取組の実施

3年目（R5）
展開・普及

- ・ 地域と連携・協働した探究的な学びの展開
- ・ コンソーシアムの県内への普及
- ・ 持続可能な体制づくり

地域課題解決に向けた探究な学び(くまモンプロジェクト)について

目的

多様な地域(熊本市・阿蘇・天草・人吉球磨)が一体となって地域課題解決に向けた探究活動(共同調査、意見交換、合同発表会等)を行うことにより、**地域への貢献及び生徒の「生きる力」の育成**に寄与する。

- 令和4年度より開始
- 各構成校にコンソーシアムを置く
- 担当者会議を定期的にオンラインで開催
- 令和5年度には、県外の学校との学校間連携を行うことを目指す。

年間スケジュール

- 1学期
 - ◆各校における研究テーマの設定、グループ分け
- 夏季休業
 - ◆各グループによる調査又は共同研究の開始
- 2学期
 - ◆グループによる調査又は共同研究の実施
 - ◆中間発表
- 3学期
 - ◆成果発表
 - ◆1年間のまとめ

R4 探究的な学び(くまモンプロジェクト)



小国ジャージー牛乳のひみつ

班員 佐藤ゆめ 山畑結美 山本純音

ネットワーク構成校それぞれが地域課題に取り組み探究的な学びを展開

「くまモンプロジェクト」において研究内容を発表し、他地域における課題を知ると同時に、研究手法を学んだり、アンケートの協力依頼をするなどそれぞれの研究の中に学校を超えた新しい学びを創出

知ってほしい！
小国の豊かな水



学校や地域の枠を超えて一体

「球磨中央百貨店」

他校とのコラボ



熊本県立 球磨中央高校

「ランチパック」
の開発



熊本県立 球磨中央高校

1. 花畑広場プロジェクトの意義



雑節ラーメンの開発



学校を超えた共同研究：小国高校と牛深高校による共同研究

	小国高校	牛深高校
1.経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsの講演を聞き「小国杉の端材の有効活用」を探究テーマとした小国高校と課題研究において「牛深イルミネーション2023」でのシーグラスを活用したランタンの制作を考えていた牛深高校が7月にオンライン会議を実施。小国高校は牛深高校がイルミネーションイベントに牛深高校の生徒が関わっていることを知る。 ・【牛深】イルミネーションの展示場所が日本庭園であり和の雰囲気にあふれる場所であるため、木材を使用した作品を制作したと考えるようになり、小国高校に小国杉を活用できないか相談。 ・【小国】夏休みのフィールドワークで、端材のうち「ちくわ」と呼ばれるものがほとんど有効活用されていないことを知り、「ちくわ」を活用した灯籠を制作し、イルミネーションイベントに一緒に展示させてもらえないか、牛深高校に提案。 	
2.生徒がしたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・牛深高校生との意見交換 ・河津製作所(木材の提供者)へのフィールドワーク及び端材の提供に関する交渉 ・「ちくわ」を利用した灯籠の制作 	<ul style="list-style-type: none"> ・デザインの考案 ・作品の制作 ・小国高校の生徒、河津製作所との意見交換
3.先生がしたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン打合せに関する日程調整 ・牛深高校との探究テーマの情報交換 ・オンライン会議にかかる生徒へのフォロー ・材料及び作品の受け渡し 	<ul style="list-style-type: none"> ・小国高校の担当先生への提案 ・オンラインミーティング(小国高校、河津製作所)の日程調整 ・資材、作品の受け取り ・イルミネーション実行委員会への参加

4.生徒の変容

【生徒の視点】

・オンラインでの他校との生徒と協働し、アイデアを共有することは新鮮であり、思考の幅が広がった。

【先生の視点】

・活動が積極的かつ意欲的になり、オンラインでの交流を重ねるごとに、自分たちの成果と課題を見出し、活動の方向を改善しながら取り組むようになった。



7月のオンライン会議



11月には完成した作品を小国高校に披露

くまモンプロジェクトにおける探究的な学びに関するアンケート結果

対象：各校のくまモンプロジェクト参加者（各校2班）

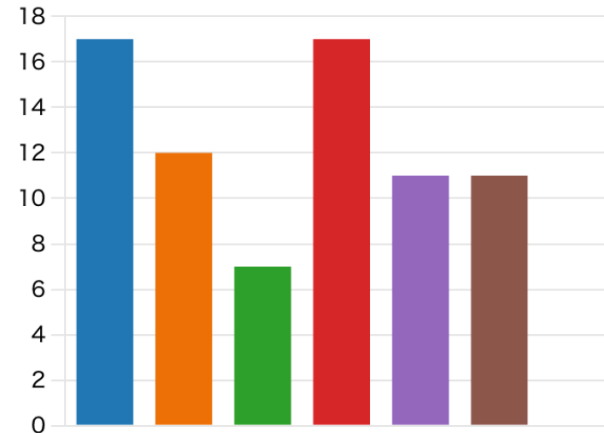
1. あなたの所属校について教えてください。

● 第一高校	7
● 小国高校	7
● 牛深高校	4
● 球磨中央高校	7



2. あなたが「くまモンプロジェクト」における探究的な学びを通して、身についたと思う力や態度について教えてください。（複数回答可）

● 地域の課題を発見する力	17
● 情報を収集する力	12
● 情報を分析する力	7
● プレゼン・発表する力	17
● 他と協働する力	11
● 地域社会に参画しようとする態度	11
● その他	0



くまモンプロジェクトにおける探究的な学びに関するアンケート結果

3. 身についた力や態度(その他)

- ・課題から地域の方が楽しめるものを考え、**実践する力や、創造する力**
- ・以前より視野が広がったと感じた。
- ・情報収集・分析に加え、それを**言語化する力**
- ・情報収集・分析から**次の課題へと繋げる力**
- ・物事を**多視点から見て考える力**
- ・研究に取り組んだことによって今までの学習で勉強できなかったことや人の関わりを学べて**実行に移す力**が身についた。

4. 関わった地域住民(大人)の変容

- ・自分たちが企画したことについて、興味を示していただけたり、積極的に参加していただけるようになった。
- ・地域に関しての関心や興味がより一層出てきたように感じた。
- ・地域の方は私たちに関して積極的に関わってくれたと思う。私たちが興味を示せばより詳しく教えてくださった。
- ・どんな意見も前向きに考えてくれた。
- ・【自由になった】私たちが提案するものの中には大人の考えていなかったものがあるらしく、はじめは驚かれたり、止められたりしていたが、今では新しい発想を一緒に煮詰めてくださるようになった。

5. プロジェクトに参加して、自分にとっての成果と課題

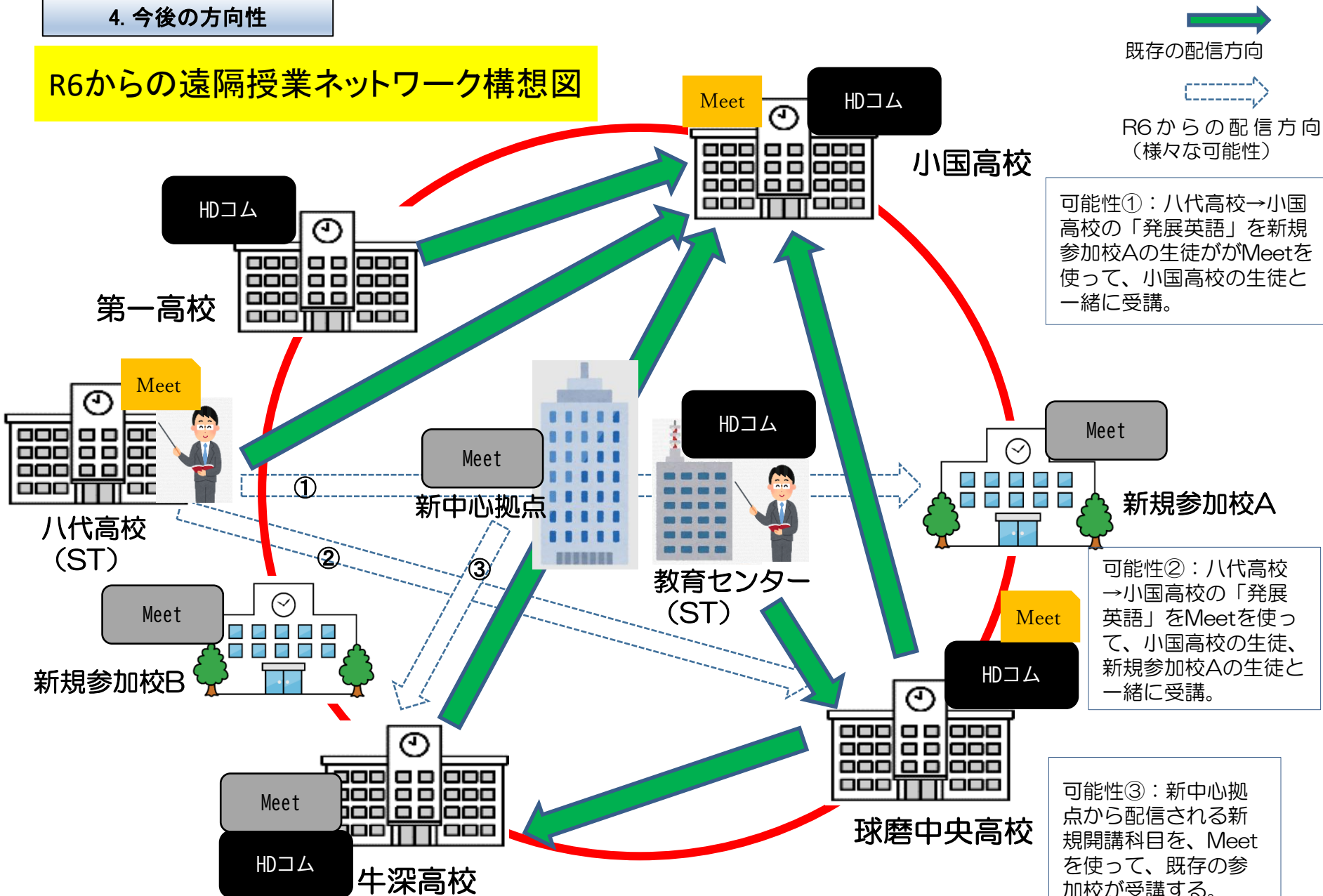
- ・災害復興支援商品を企画し販売まですることができた。もっと流通チャネルを広げたい。
- ・地域の見方が変わった。どうしたら人から見ていただけるかということをもみなと協力して話し合うことができた。
- ・課題を見つけ、考え、行動することを一人ではなくプロジェクトに参加している仲間たちと共に行うことで新たな考えや価値観を知ることができ、視野が広がることにつながった。課題としては、1年間という期間を見通して今、こういったことをすべきなのかを明確にしておけば継続的でかつ効果的な活動ができたのではないかと感じた。
- ・課題を発見する力や解決をするためにどんなことをすればいいか、どうすればもっと良くすることができるかを自分たちで考えたり、他校とオンラインミーティングなどを通していろんな視点からのアドバイスをもらっていい刺激になった
- ・成果としては地域の課題に関して触れながらも人を楽しませるようなものを作れたと思う。また、自分自身の成長点になったと思う。課題としては、もっと情報を収集すべきだったと感じた。他校の発表を見ると、時間をかけて念入りに調べ根拠を立てていたのも、もっと情報を集めること、そして**アグレッシブに行動しなければならないと感じた。**
- ・(前略)それを重ねていく中で課題を発見・解決する力、情報を収集・分析・言語化する力、当たり前だと思っていたことを考え直す力、一つの物事を参加者としてだけでなくプランナーとしてなど多方面の視点を持って考える力などを得ることができた。私はこのプロジェクトに参加し、活動したことを誇りに思う。
- ・課題は自己完結してしまいがちなこと、計画を立ててそれが外れた時の修正能力が不十分なことの2点である。

3年間のまとめ(地域との協働)

CORE事業を通して熊本県全体として明らかにしたかったこと	熊本版COREハイスクール・ネットワークにおけるコンソーシアムの連携強化の実現
目的・目標	<p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none">・学校間連携の運営体制、地域との協働を通じて <p><u>「多様な学びの中で、地方の資源を発掘し、活かし、伸ばす人材の育成」や、「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高等学校」を実現する。</u></p> <p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none">・<u>県内(熊本、阿蘇、天草、人吉球磨)を一体化した地域課題解決のための探究活動(くまモン(熊本の人)プロジェクト)の実施</u>・<u>コンソーシアムと学校運営協議会を一体化した、地域の拠点としての高等学校づくり。</u>・<u>ネットワーク構成校と地域の特徴を生かし、学校外の教育資源を活用した探究的な学び及び地域課題の解決等に関する探究的な学びの実現</u>
3年間の成果	<ul style="list-style-type: none">・「くまモンプロジェクト」の実施による構成校同士の交流、協働・コンソーシアムを活用した地域課題解決のための探究活動の充実・学校を超えた共同研究の実施・クラウドを活用したそれぞれの探究活動内容の共有及び「県立学校 学びの祭典」へのCOREブースの出店による共同研究の紹介
総括	<p>高校教育指導班としては遠隔授業を中心に取り組んできたが、「くまモンプロジェクト」の実施により、コンソーシアムを活用したそれぞれの学校における探究活動を教育委員会としても深く知ることができた。アンケート結果から生徒や地域の大人には変容が見て取れ、一定の成果はあったと思われる。組織的には、学校の魅力化に取り組む「高校魅力化推進室」との繋がりが強くなり、委員会内では、1班1室が高校魅力化の両輪となった推進ができた。</p> <p>各校におけるコンソーシアムは学校運営協議会を兼ねているのが現状であり、地域課題解決を推進するためには、地域外の外部有識者を加える必要があると感じた。県としては運営指導委員を委嘱しているが、定期的な指導・助言仰ぐために、教育委員会が各コンソーシアムの構築にもう少し積極的に関わり、多様な委員構成が可能となるように、予算を確保する必要性を強く感じた。</p>

4. 今後の方向性

R6からの遠隔授業ネットワーク構想図



整備済みのHDコムは残したまま活用し、新たに全ての県立学校に配備されている端末でMeetを併用しながら事業を拡充する。新中心拠点及び新規参加校には、配受信者のストレスを軽減するため、高性能のカメラやマイクを配備予定。

ご清聴ありがとうございました。